

ソーシャルキャピタルに着目した 地域の安全・安心

松川 杏寧

はじめに

日本は世界的に見ても犯罪認知件数が少なく安全な国である。このことは、自他とも認めるところである。しかし、数は少ないものの凶悪な事件のセンセーショナルな報道や、体感治安、犯罪不安感については、内外での「安全な国 日本」の評価と一致しない。安全と安心は確かに別のものであるが、ある程度の関連性や連動は存在しているはずである。安全かつ安心できる社会はどうすれば実現するのだろうか。本稿では住民によって地域を安全・安心にするために必要なツールであり、地域全体の暮らしやすさや地域福祉の根幹にもなる概念としてソーシャルキャピタルに着目し、ソーシャルキャピタルとは何であり、どういった効果を地域にもたらすのか、どうすればソーシャルキャピタルを地域住民の手で高められるのかについて検討する。

CPTED とソーシャルキャピタル

まちの安全・安心はそこに住む住民の手で確保・維持されるべきであることを最初に述べたのは、アメリカの都市計画学者であり、ジャーナリストであり、活動家でもあったジェーン・ジェイコブズである。ジェイコブズは「都市の治安は、街路の利用者によって織りなされる『複雑でほとんど無意識のネットワーク』によって維持されている」(Jacobs 1961=2010: 32) とし、地域の安全・安心の担い手は地域住民自身であると述べている。

ジェイコブズのこの議論は当時のアメリカで行われていたさまざまな都市計画のあり方に一石を投じると同時に、大きな社会的な動きを生み出した。それが「環境犯罪学」という分野の成立への貢献である。ジェ

イコブズの著作による理論に影響を受け、ほぼ同時期に2人の専門家がそれぞれの理論を発表した。1人目は犯罪学者のC・レイ・ジェフェリー、2人目は建築学のオスカー・ニューマンである。ジェフェリーはCrime Prevention through Environmental Design, いわゆるCPTED, 防犯環境設計という名称を提示した初めての人物である。CPTEDは犯罪発生前に物理的及び社会的環境全体を犯罪機会が減少されるよう設計することであり、ジェフェリーの後の様々な分野の知見を取り込み、学際的な犯罪予防の手法に至っている。当初ジェフェリーが示したCPTEDの手法は、犯罪予防における物理的な設計に重きを置き、その具体的なアプローチや実践例を取り上げるものであった。さらに犯罪に関して社会的要因を重要視する社会学分野に対する批判として、生物学的要因、例えば犯罪者の脳内の状況などの重要性を軽視していると論じ、個人の行動や脳といった生物学的見解をより取り入れていったことから、当初の物理的設計による犯罪予防から大きく道を逸れることになり、名称の一般的な知名度とは逆に彼自身の考え方は採用されなくなっていった(朴2002, Wortley & Mazerolle 2008=2010)。

では実際に主に採用されているCPTEDの中身は何なのかというと、オスカー・ニューマンの「まもりやすい空間」の概念である。「まもりやすい空間」は次の4つの要素から構成されている(Newman 1972=1976)。

- ① 「領域性」による空間の所有者や当事者意識の喚起
- ② 「自然な監視」の機会を提供するデザイン
- ③ 「イメージ」が否定的なデザインとなり周囲から孤立することがないようにすること
- ④ 「地理的並置」によって安全な領域と隣接するよう空間をスケジュールする

現代日本においても、CPTEDの考え方を取り入れた防犯が、随所で呼びかけられている。しかし、ジェイコブズから始まったはずのCPTEDの考え方を見ると、CPTEDはあくまでもジェイコブズが指摘し「無意識のネットワーク」による安全・安心の確保・維持を阻害しないような都市、環境デザインについて語られているだけで、その背後にあるべき「無意識のネットワーク」はどのように形成され、それがどの

ような効果を発揮するののかについては触れられていない。確かに CPTED が提示するように自然な監視ができるようなデザインは必要であるが、そこに住む住人自身が当事者意識を持って近隣に目を配らなければ、いかに人目が多く自然監視が行き届くデザインのまちであっても、人々の視線は自然監視の視線にはなりえないのである。

このジェイコブズの言う「複雑でほとんど無意識のネットワーク」について着目し、「ソーシャルキャピタル」という概念として再発見し世界中に広めたのがロバート・パットナムである。ソーシャルキャピタルは英語では social capital と表記され、日本では主に「社会関係資本」と翻訳されている。直訳すると社会資本になるべきところであるが、日本にはすでにライフラインなどのインフラストラクチャーを示す経済学用語として導入されており、あいまいさを回避するために「社会関係資本」と訳されるようになった。その定義はその訳語から推察されるように「人と人との関係性、つながりの中に含まれている資源」のことである。パットナムは著書『孤独なボーリング』の中で、「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」(Putnam 2000=2006:19) と定義している。もう少しかみ砕くと、人々のつながりとそのつながりによってもたらされるお互い様や信頼できる、当てにできるという倫理観や慣習のことを総合的にソーシャルキャピタルと呼んでいるのである。本稿におけるソーシャルキャピタルの定義は、このパットナムの定義に準拠する。

このような「関係性の中に含まれている資源」についての研究は、ソーシャルキャピタルが一般的に広がるまでに、社会学などの分野ですで行われていた。例えばエミール・デュルケームは、個人間での社会的紐帯をより大きな社会を紡ぐための糸としてとらえ、それを「連帯」という概念で捉えた。デュルケームはこの連帯の強さが、自殺を防いだり逆に促したりすることを、『自殺論』で論じている (Drukeim 1897=1985)。ピエール・ブルデューは「社会的再生産」、つまり支配階級や被支配階級という階級が再生産されていることを説明するために、経済資本、文化資本、そして社会関係資本を用いて説明した。同等の経済資本や文化資本を有していても、個人が所属する家族や階級などの社会集団の資源に差があれば、その影響によって不平等が生じるというのがブル

デューの理論である (Bourdieu 1986)。

ブルデューのように集団全体に利益をもたらす資源に対して、個人が得る利益に着目したのがナン・リンである。リンは個人が有する資源は個人的資源 (財産や学位など) と関係的資源 (コネクションなどのつながりを通じて得られる資源) の2種類があり、この2つが個人が得られる利益に影響するとした。さらにリンは、自身の社会官営資本の概念を「個人財としてのソーシャルキャピタル」、ブルデューの概念を「集合財としてのソーシャルキャピタル」として分類定義した (Lin 2001 = 2008)。

2つあるソーシャルキャピタルのうち、ジェイコブズがまちの安全・安心の基盤として指摘したのは、集合財としてのソーシャルキャピタルである。彼女は著書である『アメリカ大都市の死と生』の中で、実際に彼女が目撃したさまざまな事例から、都市計画、まちの安全・安心について述べている。その中で、若い女性2人がナンパに失敗した男に絡まれた事例が挙げられている。この時、若い女性も絡んでいる男も、まちの住人ではない、いわゆるよそ者である。それにも関わらず、男が女性たちに危害を加えないよう、近隣住民が夜遅い時間に集まって周りを取り囲み、警察を呼んでいた。女性2人はまちの住人と直接的な知り合いでないにもかかわらず、絡まれた場所で平時からはぐくまれていたソーシャルキャピタルの恩恵に預かれたのである。つまりまちの安全・安心に直接的に重要なのは、集合財としてのソーシャルキャピタルなのである。

これらのソーシャルキャピタル研究に対して、理論的批判を行ったのがアレハンドロ・ポルテスである。ポルテスはソーシャルキャピタル研究の中心となっているパットナムの研究について、1) トートロジーの回避、2) 歴史的起源に関する系統的解明、3) 因果律の確保、4) 外部要因の統制の4点において批判した。つまりパットナムの研究は、1) ソーシャルキャピタルの源泉とソーシャルキャピタルそのもの、ソーシャルキャピタルによる効果を区別して違う尺度で測定し分析する必要があること、2) ソーシャルキャピタルが醸成される社会的背景や人間生態学的差異について明らかにすること、3) 因果の方向性が正しい一方向に固定されていること、4) ソーシャルキャピタル以外の要因につ

いて検討することの4点について、満たす必要があるとポルテスは指摘したのである (Portes 1998, 2000)。

以上の論点から、本稿ではCPTEDの背後に必要なソーシャルキャピタルと犯罪予防について、このポルテスの4点について留意しつつ検討を行うことをめざす。さらに得られた知見をどのように地域住民に還元し、実際の犯罪予防に活用するのか、その方法論について検討を行う。

これまでのソーシャルキャピタル研究

パットナムが広めたソーシャルキャピタルの概念はもちろん日本にも上陸し、社会学や政治学などの分野で研究がすすめられた。ソーシャルキャピタル研究において難しい課題となっている点の1つが、ソーシャルキャピタルそのものをどうやって計測するのかという点である。さまざまな研究がある中で、全く同じ尺度を用いて計測を行っている研究はほぼないのが現状である。

そんな中、神戸市ではそもそもソーシャルキャピタルとは何でどのように計測すればいいのかという問いに対して、学術関係者だけでなく行政や市民、各種団体の関係者など、さまざまステークホルダーを巻き込んだワークショップからスタートし、10年以上かけて調査検討を続けている。神戸市は第二次世界大戦以降の近代日本において、初めて都市部を襲った直下型地震である兵庫県南部地震により大きな被害を受けた。この阪神・淡路大震災は現在の日本の災害対応に関する制度や方法論の大元となっている災害である。災害からの復興には10年以上かかると言われているが、この数字も阪神・淡路大震災からの知見である (復興の教科書 2014)。神戸市の復興は、地域住民自身の手によって進められた。地震による家屋倒壊と、その後の漏電火災による被害からの復旧・復興において、主だった地域で区画整理事業を行う必要があったことが、その理由の1つである (※減歩などの問題が発生するため、住民対行政では解決が難しく、住民同士の対話が必要だった)。住民自身の手による復興は、その後の東日本大震災の被災地でも取り入れられ、各地区でまちづくり協議会が発足している。しかし神戸でこの方法がうまくいったのは、そもそも住民自身の手によるまちづくりのしかけが動いていたからである。神戸市では、昭和51年に「神戸市民の福祉をまもる条例」の

制定を行って以降、地域住民により自立した地域福祉、まちづくりを推進してきた「ふれあいのまちづくり協議会」事業の実績があったのである。この土壌があったからこそ、震災後の住民による復興が動いたのである。この事業は現在でも続いており、地域コミュニティの単位としてふれあいまちづくり協議会（以下、ふれまち協とする）が存在している。

以上のような住民自治の経緯から、神戸市では2006年に「ソーシャルキャピタル協働政策研究会」が発足し、当時行われていたさまざまな地域活動について、事例検討のワークショップを行った。このワークショップにより、ソーシャルキャピタルおよびその形成を促進する要因として、1) 地域・テーマの興味・愛着、2) あいさつ、3) イベント、4) 子どもの関わり、5) 多様な住民参加、6) 共通の課題、7) 行政の支援、8) 組織の自律性、の8つの軸が発見された（立木 2007）。その結果をもとに調査票を作成し、各自治組織の代表者に「神戸市内自治会・管理組合基礎調査」を行った。この調査は2007年、2008年、2010年、2013年および2016年に行われている（立木 2008、松川・立木 2009、2011 a、2011 b、立木・松川 2012）。この調査は郵便番号単位区という、小学校区やふれまち協よりも小さい単位で調査を行った。本稿では、2010年までの神戸市調査の結果と、これらの知見をいかに地域に還元するのか、その方法論について述べる。

研究方法

対象

前述の通り、調査の対象は各自治会・町内会の代表である。分析単位である郵便番号単位地区や元学区は、複数の自治会・町内会から構成されている。各調査の回収率などの調査概要は、表1の通りである。

表1 各調査の概要

	配布数	有効回答数	回収率
2007	2,637	1,813	68.80%
2008	2,742	1,565	57.10%
2010	2,704	1,972	72.90%

さらに神戸市消防局から1996年から2009年までの13年間の神戸市内の放火件数を、兵庫県警察からは2006年から2009年までの3年間の窃盗犯罪認知件数を頂き、客観的な観測データとして分析に投入した。

指標

前述のワークショップ結果をもとにした調査票であり、ソーシャルキャピタルの源泉としてその形成促進要因を計測する項目を、ソーシャルキャピタルそのものとしてその推定量を計測する項目を、ソーシャルキャピタルの効果として地域の秩序の乱れ（無作法性）や犯罪不安感、高齢者や子育て世帯の住みやすさを計測する項目について尋ねた。ソーシャルキャピタルの源泉を計測する項目は、8つの軸をもとに地域活動を活発にしようという努力が見られるかを問うている。ソーシャルキャピタル推定量を計測する項目については、おすそ分けや相互扶助のつながり、近所づきあいについて問うている。ソーシャルキャピタルの効果として地域の秩序の乱れ（無作法性）については、未成年の喫煙やゴミ捨てマナーなど、犯罪リスク知覚については自身が感じる犯罪に巻き込まれる可能性を、犯罪不安感については自身が感じる犯罪にまきこまれるかもという不安を、高齢者や子育て世帯の住みやすさを計測する項目については追加で行ったワークショップの結果をもとに作成しており、近所の子どもの下の名前を言えるか、高齢者の見守りや活動への参加といった項目を用いている。調査票は調査ごとに分析結果をもとにブラッシュアップを行っており、各尺度の項目数に変動がある。

分析手法

これらの質問項目の回答は、因子分析、主成分分析、最適尺度法を用いて変数化、数量化し、共分散構造方程式モデリングで多変量解析を行った。これらの分析はSPSSおよびAmosで行った。2007年データの分析の際に設定したモデルは図1の通りである。

神戸自治会調査(2007年12月)分析 Aggregate Model 8
 df=31 χ^2 自乗=41.792 p=.093 GFI=.986 AGFI=.975
 CFI=.976 RMSEA=.025 AIC=89.792

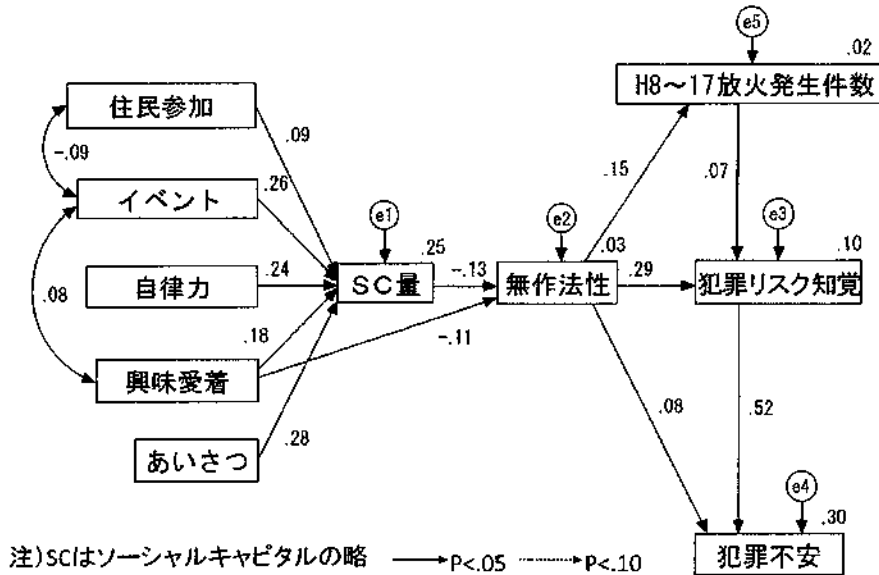


図1 基礎モデル

ソーシャルキャピタル（地域力）の源泉，推定とその効果

神戸では3年分の調査を用いて、ポルテスのソーシャルキャピタル研究の4要素を満たすべくパネルデータによる分析を行った。説明変数であるソーシャルキャピタルの源泉の変数は2007年データから、ソーシャルキャピタル推定量および外部要因として想定されている無作法性の変数は2008年データから、ソーシャルキャピタルの効果である犯罪不安感の変数については2010年データから用いている。ソーシャルキャピタルの源泉と推定量とその効果を別の尺度で計測していること、パネルデータを用いることで時間の流れによる因果律の確保を行っていること、ソーシャルキャピタル以外の外的要因として無作法性の影響を検討していることから、ポルテスの指摘のうち3つについては解決された。最後の一点、歴史的起源については、直接モデルに投入はできていないが、年齢や世帯構成など、国勢調査のデータを用いたクラスタ分析によって、神戸市内を5つの地域に分類した。

まず数量化の結果であるが、図2の分析結果を見てみると、左側にあるソーシャルキャピタルの源泉の5つ、「多様な住民参加」、「イベントの活用」、「組織の自律力確保」、「興味・愛着の喚起」、「あいさつの励行」

ソーシャルキャピタルが 地域の安全・安心に与える効果

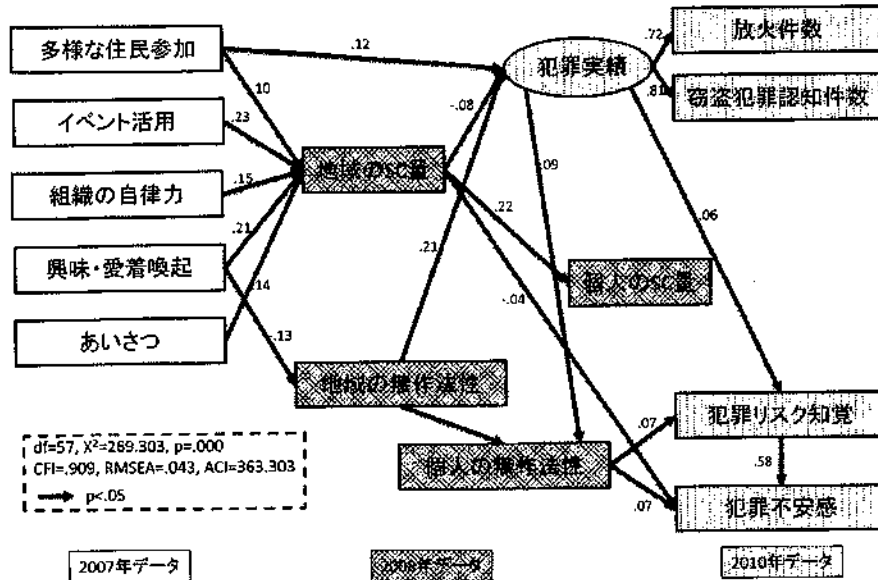


図2 共分散構造方程式モデリングによる分析結果

が原因となって、地域のソーシャルキャピタル推定量が規定されている。矢印の部分に書いてある数値が、変数間の関係の強弱を示したものであり、この値が正であるということはこれら5つの要因が高まるほど、ソーシャルキャピタル推定量も高くなるという、正の関係であることがわかる。「多様な住民参加」が「地域のソーシャルキャピタル推定量」に与える効果は0.10, 「イベントの活用」が「地域のソーシャルキャピタル推定量」に与える効果は0.23となっている。つまり「多様な住民参加」も「イベントの活用」も「地域のソーシャルキャピタル推定量」を高める効果を持っており、その効果は「イベントの活用」の方が強いことが分かる。このように、矢印の方向と矢印に付与された数値を読み解いていくと、以下の5つのことが分かる。

- ① 5つのソーシャルキャピタルの源泉は、それぞれに地域のソーシャルキャピタル推定量を高める効果がある。
- ② 地域のソーシャルキャピタル推定量は個人のソーシャルキャピタル推定量を高め、犯罪実績と犯罪不安感を低下させる効果がある。
- ③ 多様な住民参加は直接的に犯罪実績を高める効果がある。
- ④ 興味・愛着の喚起は直接的に地域の無作法性を低下させる効果がある。地域の無作法性は、独立して犯罪実績を高めたり、個人の無

作法性を経て犯罪リスク知覚と犯罪不安感を高める効果がある。

- ⑤ 地域のソーシャルキャピタル推定量は、直接的に犯罪不安感を低下させる効果があるが、個人のソーシャルキャピタル推定量にその効果は見られなかった。

これら5つの発見で特に重要なのは、地域のソーシャルキャピタル推定量には、人々が感じる犯罪不安感を低下させるだけでなく、直接的に実際の犯罪発生を抑制する効果がある点、つまり、地域の安全・安心に寄与するのは地域のソーシャルキャピタル推定量であるという点である。

この結果から、ソーシャルキャピタル推定量の向上について具体的に見ていく。「多様な住民参加」は、様々な立場の住民、地域の団体や事業者が地域活動への参加を促すことで高められる。次に、「イベントの活用」は、地域住民が主体的にイベントを企画・開催し、運営する機会を設けることで高められる。「組織の自律力確保」は、地域組織の運営を人任せにせず、地域住民それぞれが我がこととして取り組めるよう創意工夫することで高められる。「興味・愛着の喚起」は、住民が地域の魅力や売りとなるヒト・モノ・コトを知り、それらを外部に発信するよう努力することで高められる。「あいさつの励行」は、意識的に御近所同士であいさつするよう心掛けることで高められる。

重要なのは、必ずしもこの5つ全てを同時並行で行わなくても良いということである。地域には、住民層や立地、産業構造など、社会的背景の違いによってそれぞれ特徴がある。その特徴に合ったより効果的な取組をすれば良いのである。例えば、高齢化が進んでいる郊外の住宅地域の場合、事業所や団体といった多様な人々を地域活動に巻き込むことより、住民が我がこととして地域組織を運営しイベントを主催していくことの方がより効果的である。

ソーシャルキャピタルの源泉の中で、最も簡単に実践できるのが「あいさつの励行」である。まずは手始めに、御近所さんと気持ち良くあいさつする、そしてそのあいさつの輪をさらに御近所さんに広げていく、そういった日々の生活の中で気軽に行えることで、地域の安全・安心は高められるのである。

地域コミュニティへのインプット

学術分野での成果をいかに調査対象地域に還元するかは、学術分野に身を置き、研究補助を受けながら研究を進める研究者としては、常に考える必要がある点である。その点で重要になってくるのは、1) 対象（本稿の研究の場合は地域住民）にちゃんと伝わるような視覚化・表現を行うこと、2) 行政や学校など、対象と広く長くつながっている機関と連携して広めること、3) 計算やワークショップを行ってもらうことで、実際に手を動かしてもらうこと、4) 活動の効果が分かるよう経年的な調査と定期的な計測結果を提示すること、の4点である。

1点目について、非常に有効な手段の一つが地図による視覚化である。本稿で使用したすべての指標は、図3のように郵便番号単位地区ごとに塗り分けて、地域住民との会合や報告会の際にお知らせしている。こうやって地図化することで、自分のまちと他のまちの比較、神戸市全体や隣の自治会・町内会と我がまちを比較することができる。ある地区の報告会では、隣の地区と比べてソーシャルキャピタル推定量が低かつ

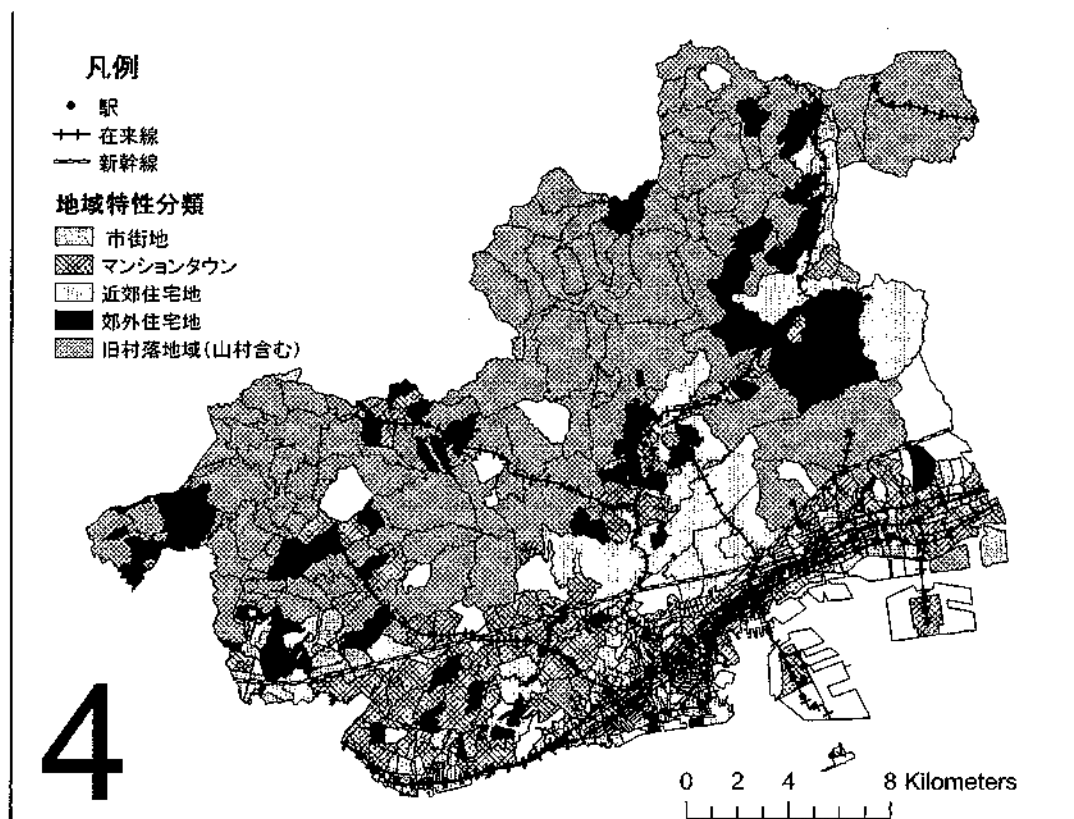


図3 神戸市のクラスタ分析結果

たことから、ライバル心に火が付いたことがあった。共分散構造方程式モデリングの結果など、複雑な分析結果についてわかりやすく伝えることも重要だが、それをよりわかりやすく視覚的に伝えることは、非常に有効な手段となるのである。

本調査は、神戸市市民参画推進局参画推進部市民協働推進課と協働のもと進められてきた調査である。彼らの協力なくして、これほどの規模の調査をこれだけの期間継続的に行うことは難しい。また、研究の成果について広く周知するために、行政による啓発活動は非常に有効な手段である。これまでの調査結果をもとに、神戸市では地域活動啓発に関するパンフレットを作成した。クラスタ分析による5つの地域の特性をもとに、どういった地域でどのような取り組みが効果的なのかといった対応表や、ある地域で実際に行われている取り組み事例などを紹介している。



図4 「あいさつしたら安全・安心なまちになる!？」
—活発な地域活動が人と人のつながり（ソーシャルキャピタル）を豊かに—

出典：神戸市 平成23年（取得年月日：平成27年4月10日）
URL：<http://www.city.kobe.lg.jp/ward/activate/support/manual/aisatsu.html>

また、実際に手を動かしてもらうことは、我が事意識をはぐくむ点で

も非常に有効である。前述のように地域ごとの報告会などで、より簡素化した調査票を作成し、報告会に参加した住民に自分たちのまちを採点してもらい、5つのソーシャルキャピタルの源泉とソーシャルキャピタル測定量の得点をもとにレーダーチャートを描く「地域カルテ」を開発中である。このようなカルテをまちの住人自身が自分たちで作成することにより、自分たちのまちに対する我が事意識をよりはぐくみ、より良いまちにするための足掛かりとしてもらうのである。レーダーチャートにすることにより、自分たちのまちの強みと弱みが分かりやすく示されるため、その結果にもとづいて、弱い部分について対策を練るのか、強い部分をより伸ばすのか、今後のまちづくりの方針や取り組みを考える指針になる。

●●地区のソーシャルキャピタル

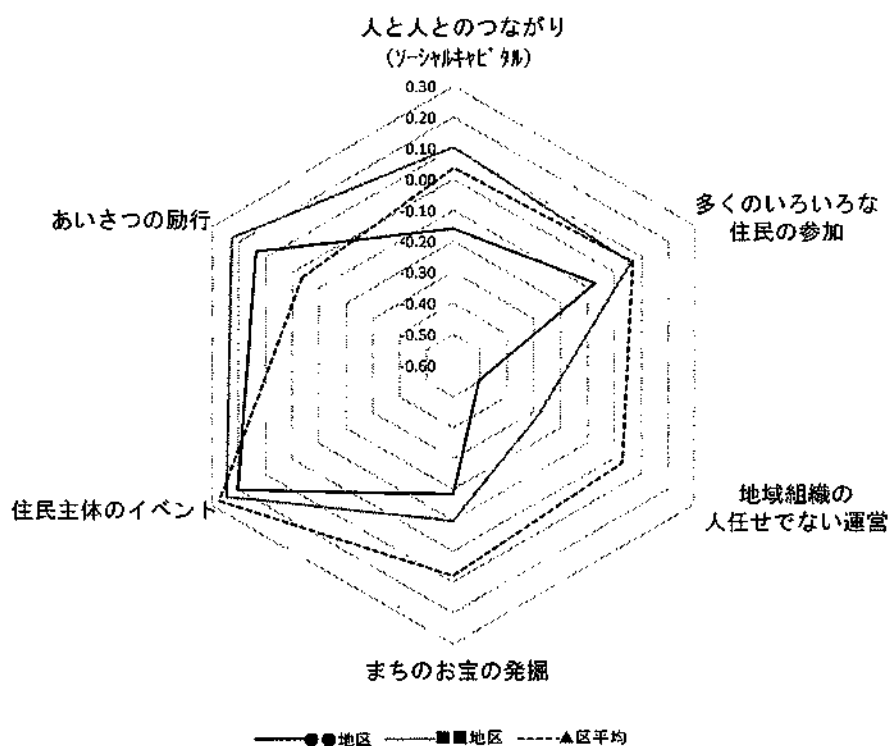


図5 地域カルテの見本

神戸市のように継続した調査を行うことで、経年変化を追うことができる。経年変化を追うことが可能ということは、自分たちのまちで新たに始めた取り組みの効果を測定することができるということである。自分たちの取り組みの効果が顕在化すれば、取り組みに参加した住民は取

り組みの継続や、さらなる取り組みへのモチベーションを高めることができる。防犯や防災といった取り組みは多くの地域で行われているが、毎回同じ内容の取り組みでマンネリ化したり、高齢化とそれに伴う役員のなり手不足、少数の役員でさまざまな役割を分担することによる疲弊など、さまざまな課題を抱えている。継続的な評価システムを構築することで、少しでもモチベーションの維持・向上につながると考えている。

おわりに

神戸市のデータにもとづいて、ソーシャルキャピタルが地域の安全・安心にどのように影響してきたのかを見てきた。さらに、実際の地域活動に活用できるようなインプットの方法についても検討し、多様な手法で研究結果の還元方法について検討した。

今後は、他の都市でも再現可能かどうかの確認や、ソーシャルキャピタルに加えてCPTEDに関する要因についても検討すること、さらに実際の地域活動により活かしやすい形での成果の示し方など、今後も調査研究を重ねていきたい。

(人と防災未来センター研究部常勤研究員)

参考文献

- Bourdieu, Pierre, 1983/1986, *The Forms of Capital*, George, Richardson, G., Westport ed., *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press.
- Durkheim, Emile, 1952, *Suicide: A Study in Sociology*, London: Routledge & Kegan Paul. (=1985, 宮島喬訳『自殺論』中央公論社.)
- Jacobs, Jane, 1971, *The Death and Life of Great American Cities*, Vintage Books. (=2010, 山形浩生訳『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会.)
- Lin, Nan, 2001, *Social Capital A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (=2008, 筒井淳也・石井光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子共訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房.)
- 松川杏寧・立木茂雄, 2011 a, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域の安全・安心に関する実証的研究」『地域安全学会論文集』, 14, 27-36.

- 松川杏寧・立木茂雄, 2011b, 「地域特性がソーシャルキャピタルに与える影響に関する研究——多母集団同時分析を用いた神戸市事例研究」『地域安全学会論文集』15: 385-394.
- Newman, O, 1972, *Defensible Space: Crime Prevention Through Urban Design*, New York, Macmillan Publishing. (=1976, 湯川利和・湯川聰子共訳『まもりやすい住空間—都市設計による犯罪防止』鹿島出版会.)
- 朴元奎, 2002, 「CPTED理論の進展と変容——ジェフリーの研究活動25年」『西村春夫先生古稀祝賀記念論文集』, 敬文堂, 171-196.
- Putnam, Robert, D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. (=2006, 柴内康文訳, 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)
- Portes, A, 1998, "Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology", *Annual Review of Sociology*, 24.
- Portes, A., 2000, "The Two Meanings of Social Capital", *Sociology Forum*, 15 (1): 1-12.
- 立木茂雄, 2007, 「ソーシャルキャピタルと地域づくり」『都市政策』127: 4-19.
- 立木茂雄, 2008, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心」『都市問題研究』60(5), 50-73.
- 立木茂雄・松川杏寧, 2012, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心 (最新報)」『都市問題研究』(大阪市) 2012年春号, 30-56.
- Wortley, Richard, and Mazerolle, Lorraine, 2008, *Environmental Criminology and Crime Analysis*. (=2010, 島田貴仁・渡辺昭一共訳『環境犯罪学と犯罪分析』財団法人社会安全研究財団.)